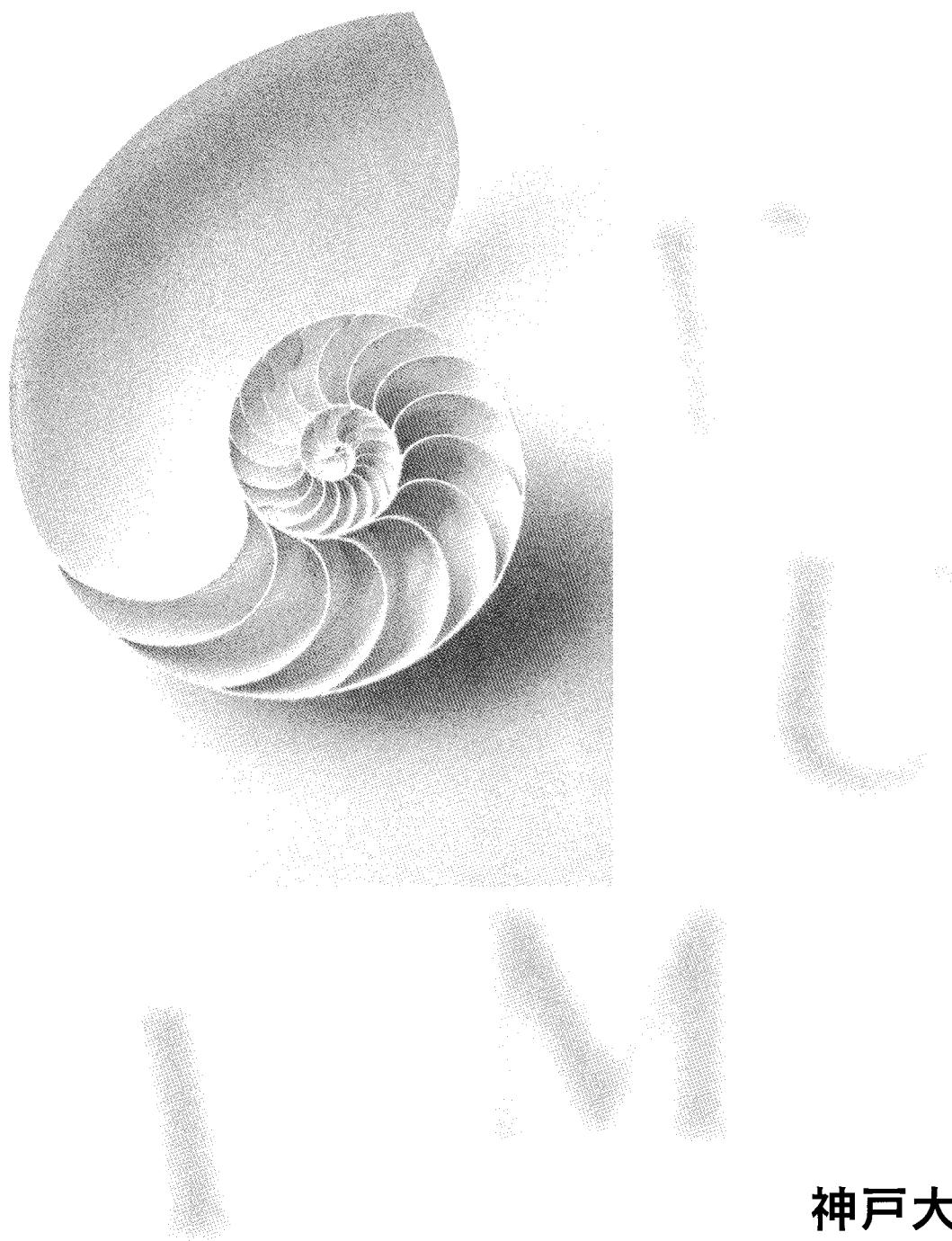


第8回

# 文窓賞優秀作品集



2014年10月発行

文窓会  
神戸大学文学部同窓会

第8回 文窓賞  
学生レポートコンクール 入賞作品

**最優秀賞**

該当者なし

**優秀賞**

「詩人になれ」  
赤羽 佳奈子（人文学科1回生）

「二兎を追う者は二兎を得る」  
伊石 昂平（西洋史専修2回生）

「真面目ボランティアの責任」  
北川 和真（地理学専修5回生）

**佳作**

「だんじり祭」  
米谷 充史（人文学科1回生）

◎ 選考会 2014年9月4日

◎ 選考委員

武藤 美也子（選考委員長）

藤井 勝 学部長（社会学教授）

山本 秀行 副学部長（英米文学教授）

鞍井 修一 花木 直彦 日高 健一

三宅 征彦 田中 賢司 廣野 幸夫

吉田 浩次 西川 京子 坂本 直樹

田中 康二 河島 真

優秀賞

# 詩人になれ

赤羽 佳奈子（人文学科1回生）

文学部は世の中に必要ないのだろうか。

文学部では何を学ぶのかという問い合わせに対し、神戸大学の文学部には15の専修があり、それにさまざまなことを学ぶのだと答える。すると、ほとんど必ずと言っていいほど15種類もの専修があることに驚き、関心を持ってもらえる。しかし、そこで調子に乗って各専修についての説明をしようものなら、返ってくる言葉は「それで、将来何になるのか。」「それを学んで何の役に立つのか。」というような、極めて冷淡なものであることが多い。文学部は世間に嫌われているのだろうか。

それでも私が進学先に神戸大学の文学部を選んだのは、いくつかの出会いに導かれたからである。

高校1年生の秋まで、私が志望していた学部は法学部であった。私は幼い頃から本が好きで、小学生の頃から1番好きな教科は国語、古典も初めて学校で習った日には日記にその感動を記すほど好きであり、中学生のときには、意味など気にも留めなかつたが百人一首に夢中になつた。そのほかにも言葉や哲学、文化など、文学部で学べるようなさまざまなことに関心を持っていた。学びたいと思っていたことのすべてが文学部にあったと言ってもよいくらいだ。それでも文学部を志望していなかつたのは、よく言われることではあるが、「将来の就職先がわからない」、また、「役に立たなそう」だからであった。そこで未熟な私は、甘い考えではあるが、同じ文系であり、社会的に役に立つことが明確で将来もわかりやすい法学部に進もうと漠然と

考えたのだった。

しかし、高校1年生の秋、ある出会いをきっかけに私の心は大きく動かされた。それは高校で誰もが経験する出会いであるのだが、多くの人は一瞬目を合わせるかどうかというくらいで通り過ぎてしまうようだ。一方、私はまともに見つめ合い、心底惚れ込んでしまった。

この出会いによって私の世界は大きく変えられたのだ。

「袖ひちて むすびし水の こほれるを 春立つけふの 風やとくらむ」

国語の授業で習った、古今和歌集に載せられた紀貫之の歌である。最初に見たときにはよく意味がわからなかつたが、これは、「夏の日に袖をぬらして両手でくつった水が、冬に凍つしまつたものを、立春となつた今日の風が解かしているのだろうか。」という訳ができる歌であり、一首のなかにいくつもの季節が込められている、という解説を読み、感動してしまつた。たつた31音の言葉が並ぶだけで、四季折々の空気感や色彩、心情までもが伝えられるのだ。和歌とはこんなにも素晴らしいものなのかな。そこで私は改めて、中学生のときに夢中になつた百人一首や、授業で習つた万葉集、新古今和歌集などの和歌を、意味や修辞法に注目しながら読み返してみた。すると、どの歌も柔らかい響きの中に美しい景色や、文字には現れないような作者の心情が込められているということに気がつかされた。そして、その中に見られる優雅な言葉の遊び心。たつた数文字でこんなにもたくさんのことを行えられ、遊び心まで持ち合わ

せる、言葉とは一体何者であるのか。昔の日本人の心には、世界はどのように見えていたのだろうか。外国では和歌はどのように表現されるのだろうか。この柔らかい響きに込められた美的感覚とはどこから来るものであるのか。この一首との出会いをきっかけに、役に立つかどうかなどという理屈を超える感動から、押しとどめることのできないほど大きな関心を抱き、私は文学部への進学を決意した。

では、なぜ数ある大学の中から神戸大学を選んだのか。

私は長野県の出身である。距離はもちろんのこと、交通手段の面から見ても、長野県と神戸は遠く離れている。文学部があり、学力に大差がなく、環境も整っている、という大学がもっと近くにないわけではない。それでも私が神戸大学を選んだのには、ここにある出会いが起因している。この出会いは、私のこれまでの人生の中で最大の出会いである。たった18歳の若者が、人生を変えるような大きな出会いを経験するなどと言うのは、大げさに思われるかもしれないが、本当に、この出会いは私にとってそれだけ重要なものだったのだ。

それは、まさに「恩師」と呼ぶのに相応しい、高校の先生との出会いであった。しかし、この先生は、担任でも、部活動の顧問でも、進路の先生でもない。この先生とは、説明するのが困難なほどに、特にこれといって表現できるような名前の付くつながりはなかったのだ。強いて言うならば、高校2年生のときに1年間だけ倫理の授業を教わった、というだけである。たった1年、2週間に3回という頻度の少ない授業ではあったが、それは私が先生の魅力に気がつくためには十分な時間であった。

高校2年生の4月、初めて受ける倫理の授業。先生は大阪出身。「素敵な」関西弁の遣い手であった。私が本物の関西弁に直接接するのはこの時が初めてだ。先生の関西弁は穏やかで、

優しくて、温かみのあるものだった。関西の方には申し訳ないのだが、それまで私は関西弁とは漫才で聞くような語調が強く、賑やかなものであるという勝手なイメージを持っていたために、穏やかな関西弁があるということは私にとってかなり新鮮な発見であった。同じ日本語という言語においても、まだまだ私の知らない世界が山ほどある。それは、直接触れてみなければわからないものなのだ。たちまち私は関西弁に興味を抱いた。関西に行き、生の関西弁に触れ、関西弁を学びたい。ここから私は関西の大学に進学しようと思い始めたのだった。

更に、素敵なのは関西弁だけではなかった。先生は、「言葉を選ぶ」人であったのだ。「言葉を選ぶ」という表現はよく使われるのだが、本当に「言葉を選ぶ」ことができる人が、世の中にどれほどいるだろうか。「言葉を選ぶ」ためには、それだけの語彙、それを自分のものにし、正しく使う表現力が必要である。それらを手に入れるためには、さまざまな書物を読んだり、さまざまな人と関わったりする中で得られる幅広い知識や経験によるたくさんの引き出しがなくてはならない、と私は考えている。先生によって「選ばれた」言葉は、一粒一粒が美しく、それでいてさりげなく、気づかぬうちに心の中に満ちてくるようなものだった。先生の手にかかるれば、難しい内容の授業も興味深いものとなり、すらすらと頭の中に染み込む。授業が楽しくて仕方がない。誰もが黙って耳を傾けたくなる。本当に素敵だった。だが、特にこれといった関わりのない先生と話をする機会などなく、ようやく先生と話をする機会を手に入れたのは高校3年生の夏。そこで進路の話をし、先生の影響で関西の大学に行きたいと考えているということを話したことから、念願叶ってついに交流が始まった。

それからというもの、相談に乗っていただきたり、ぽつりぽつりと人生に関するお話を伺っ

たりしたのだが、話せば話すほどに魅力を感じずにはいられなかった。押しとどめることのできない尊敬の気持ちが湧き上がる。私も先生のように引き出しを多く持つ人になりたいと思った。そのためにはどうすればよいのだろうか。そして後に、先生が神戸大学文学部の卒業生であることがわかった。神戸大学。文学部があり、私の行きたい関西もある。そこで単純な私は、神戸大学に何か素敵な人になるための鍵が隠されているはずであると考え、いろいろと調べた結果、志望校としてここを選んだのであった。

こうして紆余曲折ありながらも辿り着いた、神戸大学文学部。そこでぶつかったのが冒頭の疑問である。

文学部は世の中に必要ないのだろうか。

私は全力で首を横に振りたい。

「もしも詩人がいなかったら、世の中はつまらないだろう。だから、お前は詩人になれ。」

これは恩師の言葉である。そこから私は考えた。文学部とは、「詩人」になるための学部なのではないか。確かに詩人がいなくとも、社会が混乱に陥ることはないだろうし、そのせいで死人が出ることもないだろう。しかし、「詩人」が違った視点から世界を見つめ、言葉を選びながらそれを表現することで、ほんの少しだけでも人の心を動かし、ほんの少しだけでも世の中を楽しいものに変えられるのだ。そして、ここでの「詩人」とは、詩を書くことを職業としている詩人だけのことを言っているのではない。私は、「言葉を選ぶ」ことができ、世界をさまざまな視点から見つめることができる人のことを「詩人」であると考えたい。先ほど述べた通りに、「言葉を選ぶ」ために必要なのは多くの言葉に触れ、経験を重ねることだ。では、さまざまな視点を手に入れるためにはどうすればよいのか。ここでも以前にいただいた恩師の言葉を借りると、「プラス 10 からマイナス 10 の世界を知った上で、プラス 3 からマイナス 3 の世

界の中で生きる」べきなのだ。これはつまり、今自分が生きている世界がプラス 3 からマイナス 3 という広さの世界であるとしたときに、そこだけしか知らずに生きるのと、そこは直接関わりのない外側の世界を知った上で生きるのとでは、見える世界が全く違うということだ。違った視点を手に入れるためには、直接役に立つとは思われないことを学ぶ必要があるのだ。

以上のことから、私はこれから文学部生として過ごしてゆく中で、書物や人との出会いを大切にしながら「言葉を選ぶ」能力を身につけ、社会に出たときに直接役に立つわけではないことを全力で学んでさまざまな視点を手に入れようと思う。そして社会に出たときに、人の命を救うような大きなことはできないにしても、自分の隣にいる人をほんの少しだけ楽しませられるような人になりたい。このようなささやかな積み重ねが、社会を質的に豊かにする力となるかもしれない。これが文学部生としての私たちにできることではないか。

だからこそ、「文学部で学んで、将来何になるのか。」という質問に対し、これからは胸を張って答えたい。

私は詩人になる。

優秀賞

## 二兎を追う者は二兎を得る

伊石 昂平（西洋史専修2回生）

僕は神戸で2度目の春を迎えた。神戸大学に入学して1年、あっという間のようだが、振り返ると色々なことがあった。1年を振り返り、僕が考え、思うことを綴りたい。

1年前、僕は受験のストレスと運動不足で体重が10kgも太っていた。家族からダイエットを強要され、僕自身もさすがに何とかしないとみっともないと思い、入学と同時にスポーツジムへ入会した。が、数回通っただけで、一気に10kg痩せ、元通りになってしまった。これはジムの効果ではなく、通学によってなされた業である。僕は大阪の南部にある岸和田に住んでいる。だんじり祭りが全国的に有名な街だ。神戸方面へ通う近所の学生は下宿をしている場合が多いが、僕は約2時間かけて通っている。1限からの時は満員電車にゆられ、バスに乗り、そして勝手がわからない大学内で迷子になり、うろうろと歩き回る。僕はぼんやりしている性格なので、うつかりすることが極めて多い。ただでさえ教室を間違えるのに、さすが神大、六甲のふもとだけあって坂が多く、歩き回るのは相当なウォーキングだ。結局、スポーツジムは何一つ効果をもたらすこともなく、むしろウォーキングで疲れすぎてジムどころではなく、さっさと1か月で退会した。

僕が通学を選んだことには理由がある。簡潔に言えば家に帰りたいからだ。情けない坊っちゃんのように聞こえるが、自宅には僕の大切な友達がいる。前回のレポートで登場した「チエロ」＝「彼」である。僕にとってチエロは切り離せない存在であり、口下手な僕の思いを表現してくれる大切なパートナーである。それゆえに文中では「チエロ」を「彼」と呼

んでいることを補足しておく。

彼との対話は毎日の日課なのだが、大学を終えて夜となると下宿では不都合が多い。環境的にも彼を一人にすることが多くなるし、彼の環境まで変えたくない。そして経費削減の目的もあってのことだ。僕の家庭は一般的な会社員の父で、言わば中流家庭である。決して貧窮してはいないが、彼との関係を継続するためにはかなりの経費がかかる。そんなこともあり、通学を選んだのだ。

僕が4歳、彼が8分の1サイズの時に出会い、時を経て11歳でフルサイズの彼と対面し、二人三脚で今まで頑張ってきた。だが僕は今、壁にぶち当たっている。僕は学業と音楽の両立を目指してきた。そして今もそのモチベーションに変わりはない。しかしそれは、僕を孤立の淵へと誘うものだった。

僕の大学生活は味気ない。大学へは講義を受けに行くだけだからだ。通学に2時間かかるため、僕は5限に授業を入れていない。最大でも4限までで時間割を組んでいるが、それでも帰宅は7時になる。さっさと夕食を済ませたにしても、練習は8時からになり、せいぜい3時間やれたらいいとこだ。僕は体力のある方ではないので、週の半ばになると疲れてしまう。自宅へ帰ってくると、気が付いたら自室のベッドで寝てしまっていることも度々だ。今になってスポーツで体を鍛えておけばよかったと後悔している。

毎日こんな生活をしている僕は、大学生活を楽しんでいるとはとても言えない。周りの学生は部活やサークル、アルバイトに励み、友達をたくさん作って楽しんでいる。僕は部活に入っていない上にアル

バイトもしていない。さらに学部にさえ友達がほとんどいない。なぜならば僕の大学滞在時間は、授業時間と全く一致している。授業が終わると風のごとく帰るのだから、友達なんてできるはずがない。唯一オケの人たちが僕を呼んでくれるので、演奏会の時は仲間に入って交流しているが、それくらいがいいとこだ。両立の辛さがじわじわと僕を襲った。だが僕は孤立に慣れている。幼いころから彼を優先してきたので、友人と遊ぶ機会がなかったのだ。それに僕の一日は時間との勝負だから、いちいち悲観してはいられない。

僕は神大合格と同時に封印していた彼との交流を再開した。合否が決まる前からコンサートやオーディションの予定が入っていたからだ。「久しぶりだな。」なんて彼と悠長に話す暇もなく、冬眠中の彼をいきなりケースから出し、一気に練習を始めた。さすがの彼も驚いたのだろう、最初は錆びついた声しか出なかつた。

そんな中の入学式、オリエンテーションで先生がこんなことをおっしゃつた。

「合格から今日までに1冊も本を読んでいない人は学部を間違ったと思いなさい。」

僕は一瞬ひるんだ。まさに僕のことではないか。何食わぬ顔をして周りを見渡してみたが、皆涼しい顔をしていた。だが、僕には立派な言い訳がある。読書はしなかつたが読譜はしたのだから。それも大量に。

楽譜というのは面白い。一見すると単なるおたまじゃくしの羅列だが、実は非常に奥が深い。楽譜には作曲者の背景や思いがつまっており、演奏者はそれを紐解いていく。そして平面的な楽譜が立体的な空間芸術になるのだ。僕が文学部を選んだ原点は音楽にあるといってよい。音楽に触れる中で歴史に興味を持ち、美術が好きになり、いつの間にか美術館に通うようになつていて。

文学部は文字通り書物の文学作品を研究する学部、と捉えられがちだが、実はその分野は極めて

広い。社会学、心理学、史学なども文学部には含まれている。

文学とは何か。大辞泉にはこうある。

「思想や感情を、言語で表現した芸術作品。」

文学と音楽は共に人間の五感に働きかける芸術であり、そういう意味で非常に密接にかかわっていると僕は思つてゐる。言い訳がましいが、上記の理由で、僕が文学部を選んだことは間違ひではないと報告しておこう。

「大学とはなんて開放的な所なんだろう。」

これは僕が大学生になって一番に感じたことだ。この解放感は受験を乗り越えたからこそ得た特権なのだから嬉しいことではあるが、同時に大学入試というものの価値が僕にはわからなくなつていて。大学が単なる通過点のような気がしたからだ。

大学とは何をするところなのだろう。専門的な知識を得るための教育機関であるのは間違いないのだが、現実は社会へ出るまでの準備機関になっているのではないか、と僕は思う。実際に1年時からすでに就職サポートなるイベントがたくさんあり、参加する学生も多くいる。もちろん学業に専念する学生も多くいるのだが、その数に劣らずして社会勉強に精を出す学生が多いのも事実だ。この現実は、受験に苦しんだ僕にとっては納得のいかないものだった。進路に思い悩んだ時期を乗り越え、辛い受験時代を過ごして大学生になった僕は、大学があまりも空虚なものに思えた。

高校までは決められた枠があり、毎日同時に学校へ行き、真面目に授業を受け、放課後は部活や予備校へ行く。毎日が大体こんな感じだ。要するに今までは何も考えなくとも決められた通りにしていれば良かったのだ。受験勉強もその一つだ。予備校に通つていれば、分析されたデータを基に作られた問題を次々に解いていく。個々が何も考えずに与えられた問題を解くだけだ。

僕が大学を空虚に感じたのは、大学には今までのような縛りがないからかも知れない。あるいは教

育の最高機関に達したこと、学業競争から解放され、逆にその解放感が空虚に感じさせたのかも知れない。

しかし受験勉強とは一体何なのだろう。大学で学ぶために必要なものもあるが、そうでないものの方が多いのではないか。最高機関で学習するにふさわしい人物を選ぶ方法が、たった1回の試験であることに疑問を感じる。高い知識が必要であることは間違いないが、もう少し資質を問うてもよいのではないか。だがそうなると、僕は振り落されるに違いない。不器用でぼんやりした性格で人見知りが激しくせに、実は非常にプライドが高く、頑固であまのじゃくな単なる変人なのだから。

さて話は戻る。前述のとおり、僕は大学において孤立極まりない毎日を過ごしている。だが全くの一匹狼というわけでもなく、プライベートにはある程度友人がいる。皆、音楽関係者だが。

僕は1年の秋、あるコンクールに出場した。そのコンクールは非常にレベルが高く、出場者は全員音楽大学の学生で、しかも相当上手い部類の人たちばかりだ。その中に一般大学の僕が参加することは、はっきり言って道場荒らしである。何しに来たんだと言われるだけだからやめろと家族に言われながらも、僕は強硬に出場し、何とか入賞を果たした。結果は奨励賞だったので満足はいかないが、新聞に大学名が載った時は、ただ一人、一般大学なのだから正直爽快感があった。

音楽関係者から、なぜ芸術大学へ行かなかったのか、とよく聞かれる。そのたびに学業も疎かにしたくなかったからだと答えるのだが、音楽を選んだ人から見れば、片手間に音楽をやっている中途半端な奴だと見えることだろう。

昨年は目まぐるしいほど演奏の機会があった。地元の新人演奏会に選ばれて出演したのを機に、あちこちから演奏の依頼を受け、毎月のように弾いている。これは僕と彼の練習の成果を発表できるのだからとてもうれしいことだ。それに、少しばかりの

演奏料ももらえるので、アルバイトをする時間のない僕には二重の楽しみになっている。好きなことで利益を得ることは本当に幸福だ。「有り難う。」と言われて演奏料を貰うとき、彼と頑張ってきて良かったと実感する。震災のチャリティーコンサートにも参加し、音楽を通して細やかながら被災地にも貢献させてもらった。来年の春には、震災のがれきで作られた楽器を、全国でリレー演奏し、復興支援するというプロジェクトで震災チエロを演奏する予定だ。口下手な僕でも、音楽を通して役に立てることは、僕の大きな自信になっている。

コンクールや多くのホールで演奏した僕は、あるハンデを痛感していた。それは楽器の力量である。彼は頑張っているし、彼のおかげで入賞もできた。だが彼には限界があり、さらに上を目指す僕に応えることは難しくなっていた。いよいよ別れの局面を迎えた僕と彼は、昨年の秋、8年間のコンビを解消し、祖母の協力と、成人祝いの前借、そして少しづつ貯めた僕の全財産をはたいて、新たな出会いを遂げた。苦楽を共にした彼との別れは寂しいものだったが、幸いにも僕の弟子が引き取りたいと申し出くれたので、ほっとした。今は大切にしている。

新たな友人とタッグを組み、僕は8月にイタリアへ演奏旅行に行く。クラシックの本場で、日本人の僕の演奏はどこまで評価されるのだろう。これまでの努力が見事に打ち砕かれる可能性が極めて高いが、得るものは大きいはずだ。必ずや肥やしにして、一まわり大きくなつてみせる。そして今秋、僕はまたコンクールに挑戦する。この経験は、いざれまた報告することとしよう。

僕は西洋史を選択した。美術館が大好きな僕は、美術への興味も捨てがたかったが、やはり世界史が好きだ。まだ個々の専修別の研究は始まっていないが、西洋の時代背景とクラシック音楽の歴史を絡めた研究をしたいと思っている。今から楽しみ

だ。だが一抹の不安もある。僕には時間が足りない。これから先、専門研究に十分な時間を割くことができるだろうか。とにかく時間を無駄にすることだけは避けなければならない。

それにしても、遊ぶ暇もなく、わずかな小遣いをもせっせと貯金し、大学と家の往復を毎日繰り返していると、周りの学生たちを恨めしく思うことがある。

時には、「遊んでばかりいないでちゃんと学業に専念しろ。」などと、親のようなことを思う時がある。自分の中に、気楽になりたいもう一人の自分が存在していて、嫉妬しているからこそ思うことだ。ではなぜこの状況を続けるのか、いつだってやめることはできる。大学生は自由なのだから。

この心の葛藤は定期的に訪れて僕を悩ませている。そのたびに思い留まり、目標を再確認して頑張っているのだが、実はその先に何があるのか、自分は将来どうなりたいのかを考えると、ビジョンが見えていない。とりあえず神戸大学卒業後は、芸術大学の大学院へ進学することを決めているのだが。

「とにかく今は頑張りたい。頑張らせてほしい。30まで勉強させてくれ。」

家族会議でその意思を両親に伝えたら、父はひっくり返った。それはもっともだ。僕のエンジェル係数（子供にかかる生涯教育費）は父の収入の半分に達しようかと言わんばかりなのだから。全ての教育機関を公立で育った僕は、普通なら経費が少ないはずなのだが、音楽によってとんでもなく跳ね上がっているのだ。これで父をひっくり返らせたのは2度目になってしまった。ちなみに1度目は僕が小学6年、フルサイズの彼と出会った時だ。

「いくらするんだ。」

「最低でも300万以上。」

そして父は椅子から転げ落ちた。

ここまでできたらもう後には引けない。とにかく頑張らねば。頑張ることでしか家族の協力に応えることはできない。

学業と音楽の両立を目指すことは、そのどちらへも中途半端に属している、と周囲には捉えられがちである。例えばコンクールで功績をあげても、一般大学に通っている事だけでアマチュア扱いを受けるのだ。時には悔しい思いをすることもあるが、僕は自分の選んだ両立という二つの目標に向かってこれからも努力していく。

「二兎を追う者は一兎をも得ず」という言葉を、僕はこれまでに何度も聞かされただろう。だが、二兎を追わなければ、二兎を手に入れることはできないではないか。僕は周りの忠告に反発しながら意固地に今まで貫いてきた。だが忠告を守らない以上、結果が出なければ「ほら見ろ、言わんこっちゃない。」と責められ、卑屈になることも多い。それが変人と言われる所以だ。この先に何があるかはわからないが、とにかく後悔だけはしたくない。そして、神戸大学を単なる通過点には決してしない。むしろ神戸大学は文芸両道の優れた大学であることを僕が実証したいと思っているぐらいだ。自分がどこまで上れるのか、自分の可能性を試してみたい。不器用でばんやりした性格だが、この思いだけは人に負けない自信がある。

もう少し見守ってほしい。いつかきっと良い報告ができることを祈って。

優秀賞

## 眞面目ボランティアの責任

北川 和真（地理学専修5回生）

「足湯ボランティアをしています。」

自己紹介でこういうと、多くの人が「なんだそれは？」という反応をします。どういう状況で、なんのために。どんなイメージが思い浮かぶでしょうか。足湯ボランティアは災害の被災地、そのなかの避難所や仮設住宅の集会所などで、災害に見舞われた方を対象に実施されます。タライにはったお湯に足をつけてもらひながら、学生などのボランティアが手もみをし、お話をするとというものです。10～15分ほどで足をふき、場合によってはそのあともお話を続けることもあります。コミュニケーションを通して、心のケアをし、災害被災者のニーズを把握することを目的としていると言えます。阪神淡路大震災や能登半島地震、東日本大震災、各地の水害など、さまざまな被災地でおこなわれてきました。

以上のように足湯ボランティアについてよく説明するのですが、自分で言いながらあまり好きではありません。手短に大体のことが説明できているとは思いますが、足湯は簡単で誰でもできるため、やる人それぞれの個性が入り込む余地があると、私は思うのです。

私はここに私らしさ、眞面目だけれどテキトーで少しイタズラっぽいところ、を織り交ぜています。神戸大学には足湯ボランティアをおこなう団体がいくつかあり、私は神戸大学東北ボランティアバスを通して、東日本大震災の被災地で足湯をおこなってきました。2011年の8月に初めて参加してから、およそ2カ月に一度のペースで実施されるボランティアバスに、ほ

ぼ毎回参加しています。今まで、私なりの足湯ボランティアについてしっかりと説明したことはありませんでした。というのもそういう機会が与えられなかつたし、私のなかでも整理しきれていなかつたからなのですが、このレポートを足湯ボランティアについて整理する機会にしようと思います。

自分で言うのも何なのですが、私の性格は眞面目だけれどどこかテキトーで、目立ちたがり屋だと思っています。足湯には私のこの性格があらわれています。気持ち良い足湯を提供したく、お湯の温度や手もみに気を配り、方言を理解しようとしてお話を聞くのですが、疲れてくると、頷いたり相槌をうつたりしていても、話はあんまり聞いていないことがあります。ときには、少しイタズラをするような心持で、足湯をしながら、黙ってにこにこして足湯を受けている方の反応を見ることもあります。他にも、歌ったり、足湯をしてもらったり、自分の個人的なことをべらべらと話したりしました。こうした態度をとったために、相手がどういう対応をすればいいかわからず、困惑するという事態に陥ってしまったこともあります。しかし一方で、私が歌をうたったらその場にいた方も歌をうたったり、私の個人的な話をしたら、それが共感をよんだりしたこともありました。そうした方々は「今日はとても楽しかった。」「今日の夜はよく眠れそう。」「明日からまたがんばれそう。」といって下さります。こういった言葉をもらえたとき、私のエゴでやっている行動が、

その場に居合わせた方に思いがけず喜んでもらえたようで、驚きとともに嬉しさがこみ上げてきます。私が今まで生きてきたなかで経験し、そこで考えたことが積み重なって形作られた、日常的な振る舞いや価値観が、足湯を通してまたま居合わせた方々に伝わったこと、その方にとってなにか共有できるところがあり、笑いや癒し、活力につながっているかもしれないこと、それが嬉しいのです。ボランティアとは言っていますが、私もまたこうして活力をえていることを実感します。私に活力を与えて下さった方々をもっと楽しませたい、次はどんな人にお会えるだろうか、こういう気持ちが、被災地に足を運ぶ動機になっていたのだと思います。

とはいったものの、最初からこのような、真面目なようでふざけた足湯ボランティアだったというわけではありません。私自身も活力をえて、そのお返しのためにまた参加したいという気持ちになりだしたのは、最近のことで、それ以前の私はただ使命感で参加していたように思われます。ボランティアをするからには被災した方々のためになる活動をするのだ、というある種の使命感は今もありますが、かつての私は、そこに自分も楽しもうという「遊び」がありませんでした。「被災者」を楽しませたいという気持ちで常にボランティア活動には臨んでいたと思います。神経を張り詰めて活動し、神戸に帰ってきたらぐっと疲れる、ということに何度もなりました。当時の私に欠けていたのは、東北の被災地で出会う方々は、「被災者」である前に他人であり、そこには気があう人もいればあわない人もいるという認識だったと、今は思います。この認識に至らしめた出会いはとうと、たとえば野宿者の夜まわりでの経験など複数ありますが、特に重要だったのは、足湯ボランティアでの出来事だと思っています。

何日か続けて活動し疲労がたまっていた私

は、ある女性の方に足湯をしてしばらく談笑したとき、集中力を欠いていました。「じゃあ、自己紹介をしましょう。ぼくが自分について話した後はお母さんも自分について話してくださいね。」という具合に話を切り出しました。そのときは自分の言動についてあまり深く考えていなかったのだと思います。私は自分の過去や、現在の環境について話し、その女性の方は、自身が震災時にどういう被害にあったのかを話しました。ほのぼのとした時間がながれました。「被災者」である前に他人なのだから、当然気があう人もあわない人もいる。もともと私は、真面目なようでどこか抜けているところがある人間なのだから、片意地を張りすぎず、等身大の姿で、その姿を面白がってくれる人と、楽しいひと時を過ごそう。そう思えるようになりました。活動を続けてきて、たくさんの人にお会ってきました。被災地や仮設住宅、ただの他人だったもののなかには、特別な場所、特別な人たちと呼べるものが、あまり多くはないですがあります。

ところで、以前サン・テグジュペリの『星の王子さま』を読む機会があり、そこにでてくる「飼いならしたものに、いつまでも責任がある」という言葉に魅かれました。私の足湯ボランティア活動と重なるところがあるように思えたからです。「飼いならす」というのは、誰かと特別な関係を築くにあたって必要とされる行為、という風にキツネから王子様に向かって説かれます。原著では” apprivoiser ” となっているこの言葉は訳者によって「なつく」や「なじむ」、「仲良しになる」など様々な言葉に訳されていますが、私は「飼いならす」が好きです。

「ぼくにとって、きみはまだ、十万人の男の子によく似た、ひとりの男の子でしかない。ぼくはきみのことなんて必要じゃないんだ。きみ

だって、ぼくを必要としていない。きみにとつてぼくは、十万匹のきつねと区別がつかない、一匹のただのきつねだからね。でも、もし、きみがぼくを飼いならしてくれたら、ぼくたちはお互に、なくてはならない者同士になれるんだ。きみはぼくにとってこの世でたったひとりの男の子になる。ぼくはきみにとって、この世でたった一匹のきつねになる…」<sup>i</sup>

「飼いならす」というと上下の関係のように聞こえるかもしれません。しかし首輪でつないで一方に生存の権利がにぎられている場合は別にして、飼いならすつもりでなにかを与えたとしても、受け取ってもらえなければ飼いならすことにはならないと私は考えます。そうなると与えた方ではなく、受け取りにきた方が飼いならしているように思えてはこないでしょうか。

「私たちがくるとあなたたち喜ぶでしょ」と言って足湯をしに来られた方がいました。「あー、たしかに。」と思いました。楽しませようと思っているはずが、楽しませられていたのです。私は飼いならされていました。

そしてキツネは飼いならすことについて王子様に説いたあと、飼いならしたものには永遠に責任をもたなければならぬと告げます。

「きみはきみの飼いならしたものに、いつまでも責任があるんだ。」<sup>ii</sup>

「責任をもつ」とはどういうことなのでしょうか。私にはまだ分かりません。しかし、私の等身大の在り方から笑いや活力を受け取り、私にも活力を与えてくれた方々に、尽くしたいという思いは自然とわきあがってきます。眠れない夜が減って、毎日を健康的に過ごせるためができる限りのことがしたいですし、また、ただ癒すだけでなく、その人たちが抱える根本的な問題を解決できるだけの人間になりたいとも思

います。私一人の力では解決できなくても、助けとなりそうな人を紹介できたらいいです。そのためにも広い世界を、いろいろな生き方があることを知っておかなければならぬのです。

ここまで私の足湯ボランティアについて綴ってきましたが、最後に東日本大震災の被災地について少し書きます。というのも、ここまで文章は足湯ボランティアに焦点を絞ってきたので、被災地の現状については触れなかったのですが、そのために、被災地が「復興」しているかのような印象を与えてしまっては不本意だからです。とはいえ、被災地がどういう状況かは人の話を聞くよりも、実際に、自分の目と耳で知ってほしいので多くは語らず、被災地はまだ「復興」といえる状況には程遠く、現地にいて考えさせられることはそもそも「復興」とは何なのか、という程度にとどめておきます。

この文章を書かせてくれた全ての出会いに感謝を申し上げます。

<sup>i</sup>引用は「TBS | 新訳星の王子さま」[http://www.tbs.co.jp/lepetitprince/tr21\\_56.html](http://www.tbs.co.jp/lepetitprince/tr21_56.html) (2014年7月31日最終閲覧) に依りました。

<sup>ii</sup>上に同じです。

佳 作

## だんじり祭

米谷 充史（人文学科1回生）

僕は毎年、秋が近づいてくると、妙な感覚に襲われる。それはたぶん、懐かしさ、というものだと思う。何がそう感じさせるのかはよく分からぬ。強いて言えば、空気感であると感じていた。気温が下がり始め、朝晩は少し肌寒く感じられ、またどんどん日が短くなってきてるのが、通学途中などで実際に目に見えて分かり始める。そういう空気感の全てが僕にそう感じさせているのかもしれない。しかし、明確な対象が何であるのかはすっと分からぬままだった。それが最近になって、なんとなく分かり始めてきた。おそらく、それは「だんじり祭」である。

だんじり祭をご存じない方も多いと思うので、少しだんじり祭について紹介をしたい。だんじり祭は主に大阪府泉州地域で毎年秋に開催される祭で、だんじり（「地車」などと書くこともある）という4輪の車輪がついた山車に綱を付け、それを曳いて、鳴物を鳴らしながら街中を練り歩き、また、走るというものである。全力で疾走しながら角を曲がる「やりまわし」など、危険の伴う面もあるが、非常に迫力のある祭である。

僕は物心がついた頃から、毎年、祭に参加してきた。それは本当に自然なことで、自分の生まれた町にだんじりが存在した、ただそれだけのことで、毎年、祭に参加するのは当たり前のことであった。例えば、正月には家族でおせち料理を食べる、ということと同じレベルでの認識である。祭への不参加は、村八分とまでは言わないものの、明らかに町内での立場を悪くする行為であった（といいつつ実際のところ、ここ数年で祭の参加者は激減しているのだが）。

しかし、去年、僕はこの1年だけ、祭への不

参加を決めた。受験勉強のためである。それはみんなにやむを得ないと判断された。正直、その選択は非常にあっさりとしたものであり、僕は心からほっとしていた。なぜなら、だんじり祭は、8月下旬から始まる毎晩の寄合や厳しい練習を経て成立し、本番は一日中走りっぱなしであるからだ。それらと志望大学に合格するための勉強は両立しえないと思われた。いや、実はこれは正確ではない。不参加を決めた理由は本当に純粋に、受験勉強のためであった。しかし、ほっとしたのは単純に受験勉強に集中できるからというわけではなかった、と言わざるをえない。毎年少なからず受けてきた祭に伴う苦痛を、今年は受けなくて済むのかと思ったからである。僕は心の奥でそれを確かに喜んでいた。

ところが、僕は結局辛い思いをすることになる。それは、しばらくして練習が始まり、毎晩、鳴物の音が聞こえてきたからだ。響いてくる鳴物の囃子を聞きながら、家で一人で勉強するのは本当に辛いことであった。なぜかとても悔しかった。参加できない自分を不甲斐なく思った。実は、僕は祭に参加したかったのだろうか。今年もだんじりに触れたかったのだろうか。この間まで不参加を喜んでいたくせに、いざ囃子を耳にしてどうして心が揺らぐのか。そして、参加しなかったがために、自分の中でだんじりが大きな部分を占めていたということを思い知らされ、だんじりの素晴らしさを再認識した。そこで初めて、僕が毎年、感じる懐かしさの正体が分かった気がしたのだ。

毎年、夏の終わりに近づくと、祭に向けての練習が始まる。そこで1年振りにだんじりに触れることになる。それからはほぼ毎晩、手にマメをつくり、土煙や泥にまみれ、汗だくになっ

て自分たちの体力の限界に挑み、華麗にだんじりを操れるように、美しい鳴物を鳴らせるように、練習を重ねる。村の者みんなで協力し合い、時には口論にもなりながら、莫大な金と時間をかけ、素晴らしい祭を実現していく。毎年この時期に、その過程を繰り返すのだ。また、だんじりは御神木でつくられている。僕は別に信心深い人間というわけではないが、それでもだんじりには、圧倒されるような莊厳を感じる。おそらく、物心がついた時からだんじりと接し続いているために、辛い練習も含めて、1年おきの祭での思い出は僕の身体的、あるいは精神的な成長や感覚とリンクする。だからこそ、そこに神秘的なものを見出してしまう、ということもきっとあるのだろう。今年もまた、このだんじりに触れるのだ、ここに戻ってきたのだ、と感じる。懐かしさにとらわれるのは、毎年繰り返すそれらによるものなのだ。

だんじりの素晴らしさを再認識したと述べたが、これは非常に分かりづらく、捉えづらいものであると思う。僕はそこから一度離れることでしか、それを捉えることができなかった。ただ、捉えることができたのは、これまで祭を通じてそれをきちんと享受することができていたからだと思う。見た目は危険で、野蛮な暴走行為でしかない。参加していて、どうしてこんなことをしなければならないのか、という疑問も当然、浮かんでくる。それでも、仲間たちと力を合わせ、最後まで全力を尽くす。そこに確かな幸福を見出すのである。現実的な利益に基づいて見れば、おそらく、そのために払った犠牲の全てが報われるということはまずあり得ない。むしろ、大部分が無に帰すことになる。だが、去年の不参加によって僕は、そこにかけがいのない本質的な幸福が存在することを知った。だんじり祭は元来、神事であり、豊作を祝い、神への感謝と祈りを示す祭であるのに、神社へのお参りという形式のみを引き継ぎ、その宗教的

な側面を失ってきているにもかかわらず、現在でも継続されている理由は、おそらくそこにあるのだろうと思う。

ところが、現状はというと、年々、祭の参加者は減ってきてているし、人々の中での祭の重要度が下がってきてている。祭は廃止すべきだと主張する人も増えてきた。毎年、祭の実施に際して強烈な反対に遭うのだ。あなた方の自己満足に振り回されるのはごめんだ、と。つまり、祭の中に幸福を見出せない人が増えてきている。確かに、なんとなく嫌厭してしまうのは仕方がないとも思える。現代人の嫌がる「キツイ、キタナイ、キケン」という、いわゆる「3K」を完全に満たしているのだから。毎年、どこかの町で死傷者が出てるし、本番は大規模な交通規制が敷かれることになるし、鳴物や掛け声などの騒音は日常生活を切り裂く。さらには、喧嘩や酒に関わる事故。まだまだある。祭を実施するにあたってのリスクや面倒事が多すぎる。

しかし、それらが祭によって得られる微かな達成感に釣り合うわけがない、と問答無用で断定されるのはどうかと思う。合理的に判断できる領域でしか評価されない。たくさんの犠牲を払って得られるものは精神的なものであり、現実的に顧われる効用として認定されない。現実的利益の伴わない幸福は、対価を払ってまで追求されない。それが「合理的判断」である。それが現代の「合理主義」である。

見えない幸福というものは、現代の合理主義の波によって排斥される傾向にあるようだ。僕はたまたま、その存在に気付くことができたために、それが今、脅かされていることにも気付くことができた。精神性より物質性が優先される。美しさよりも便利さ。それは自分たちの生活の向上に一見して、結びつかないと判断されるものを、非合理として即座に切り捨てる行為である。しかし、そこにも幸福は存在する。我々現代人は目に見えない幸福を非合理として排斥

している。しかも無意識のうちに。

合理主義や合理的価値判断が世の中を闊歩する中で、敢えて僕は今、幸福をはかる物差しとして、現代的合理性とは異なるものを提示したい。経済的に日本より貧しい国でも、国民の幸福感が非常に高い国はたくさん存在する。金銭的な意味での裕福な生活は幸福には直結しない。精神的余裕が必要なのである。現代的合理主義のもとに生きる我々には、今行っていることが可能な限り未来に実質的に役に立つように行動することが求められる。役に立たないと思われるものは切り捨て、役に立つと思われるものを選択するために、あくせくしている。常に正しい選択をするよう迫られ、精神的余裕は感じられない。自分を縛り、強迫観念を植え付けるのは、安定した未来を過度に望む自分自身であるのだ。しかも、現代人は時計を、さらには携帯電話までもを、日常に持ち込んだ。正しい未来に向けて、常に具体的に計画を意識して行動することが求められることになった。

より良い未来への欲求、あるいは、人間の知の結晶である、そういった機器の使用があってこそ、我々は人間である、というのは正しい。人間を人間たらしめるものは、高度に発達した知能であり、それを使いこなし、より良い未来を歩める能力である。しかし、我々は人間であるということに驕ってか、それを振りかざすことに夢中で、生物としての自然な欲求を無理矢理、抑制してはいないだろうか。極端に合理主義な世の中に疲れ果て、擦り減っている人は少なくないと思う。

僕は、本能にのみ従って生きていた原始時代に回帰すべきだとは思わない。たまにはルーティンな日常を飛び出して、羽を伸ばし、精神的余裕を求めてもいいのではないか、ということである。自分の損得を考慮してから行動するのではなく、自分がしたいと思うことを自然の本能に従って行う。もちろん、社会の規範の内

で、である。あるいは、社会の規範がそういう日を設定していることが多い。それが例えば、夏祭りや秋祭りといったハレの日である。合理主義が標準的な物差しである、これから先の時代でも、こういったものは確実に必要だと思うし、だんじり祭はそういう場の1つになっているはずだと僕は思う。